

# 丸山美由紀／高尾静佳

おおやま病院エントランスホール/2019年7月6日

軽やかなワルツの躍動、しつくりとした楽しさを感じ、聴き慣れたピアニストのそれ、グランドピアノ効果。「猫のワルツ」、明快な快活さ、品格がよいスピード感、途轍もなく早く演奏したブーニンさんは別物。

「着飾って煌びやかに」、のっけからアッケンカラのアクティブさ、アクセル全開のトップモードの独壇場。持っているもの出し惜しみなく。ストロングポイントをこれでもか、いい意味で若者の突っ走り、技量の裏打ち自信に満ちて。表情豊かに恨み辛みのブチマケ、次第々々にねじ巻きハイテンション。艶めかしさドライ、爽やかで健康的明るさ、ソフトランディングを求めず。近しさの感触、バーンスタインさん故、大時代的でない聴き易さ。オペラ、原語や背景がわからないから、想像力働かず右往左往、そんな苦手意識も和み氷解、縦横無尽の歌い手に感謝。

他方、日本歌曲への思い入れ、歌詞をトコトン吟味、イマジネーションを巡らす、そんな風情。丁寧にジックリしんみりと、お気に入りの言葉と旋律にもたれ込み憑依、聴き手を誘い込む。合唱などに縁遠かった我が身への裏返し、素直に入り込めないコトを恨めしく思う。高校1年の音楽授業、テストで「出船」を歌ったのが最後、伴奏の先生(父親)を少しばは納得させたのかしら、音楽の才能は幼い時見限られていたが。

「愛情物語」、カーメン・キャバレロさん、ノックターン、アタマの中では連想ゲーム。堅苦しさから息抜き、ロマンチックな溺れ崩れ、くつろぎオアシス・タイム。そう「愛の夢」も、プレスリーさんのレコードが最初、「ラスベガス万才」の挿入歌、10年程経て原曲を知った思い出。昔どこかの音楽祭、キャシー・バーベリアンさんの「涙の乗車券」、ベル・カント調、初心者の音楽学校生の想定、そんなスタンスもありかな、一人合点。(2019.7.10)

ショパン：ワルツ 1番 変ホ長調 Op.18「華麗なる大円舞曲」

A.スカルラッティ：董

石川啄木－越谷達之介：初恋

野上彰－小林秀雄：落葉松

プッチーニ：「ボエーム」より「私が街に歩けば」

プッチーニ：「ジャンニ・スキッキ」より「お父様にお願い」

ショパン：ワルツ 6番 変ニ長調 Op.64-1「小犬のワルツ」

ショパン：ワルツ 4番 ヘ長調 Op.34-3「華麗なる円舞曲(子猫のワルツ)」

ショパン－ストロフ・ダニング：愛情物語

---

バーンスタイン：「キャンディード」より「着飾って煌びやかに」

(アンコール)

木下牧子－岸田衿子：竹とんぼに

---